

## 創立者 W. R. ランバス終焉の地を訪ねて

～ 軽井沢・横浜・原田の森・神戸 ～

池田 裕子

関西学院を創立した W. R. ランバス (1854～1921) の肖像画 (油彩) が関西学院同窓会に寄贈されました。肖像画をお描きになった村上剛康さん (1979 年経済学部卒業、横浜市在住) は、ご寄贈の理由をこう説明されています。「今年は故ランバス氏の没後 100 年に当たり、息を引き取った地が横浜であることから氏の肖像画を描こうと思い立ち、ひと月を掛けて制作しました。…同窓会本部の銀座オフィスが同窓生にとってより関学らしさを感じられる場になれば、銀座オフィスのスタッフとしてもうれしく思います」(肖像画は現在、同窓会銀座オフィスで常設展示されています)。

創立者に思いを馳せ、絵筆を握られた村上さんに触発され、私は 100 年前のランバス最期の足取りをたどってみようと思い立ちました。

南メソヂスト監督教会の監督として、シベリアと満州での仕事を終えたランバスは、1921 年 8 月末に来日しました。目的は同教会日本ミッションの年次総会を軽井沢で主宰するためでした。年次報告にはこう記されています。「第 35 回年次総会は、1921 年 8 月 30 日から 9 月 4 日まで、軽井沢の講堂 (the auditorium at Karuizawa) で開催された。ランバス監督は、病のため横浜の病院に行かざるを得なくなるまで議長を務めた。それ以降は、監督の要請により、J. C. C. ニュートン博士が議長を務めた」。

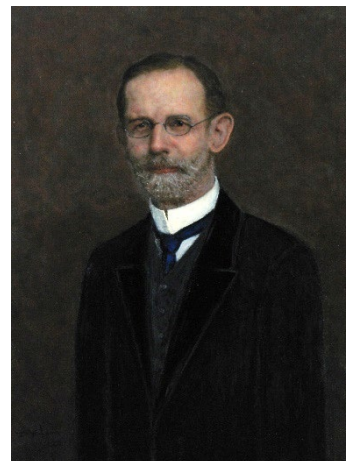


軽井沢ユニオン・チャーチは、1897 年、ダニエル・ノルマンにより設立された。ヴォーリズの設計により 1918 年に建てられた会堂が今も使われている。

9 月 2 日、ランバスは、W. E. タウソンに付き添われ、横浜に向かいました。その 14 年前、17 歳のオランダ人少年は、朝 8 時 30 分に横浜から電車に乗り、品川で山手線に乗り換え、田端発 10 時 25 分の汽車で午後 4 時 51 分に軽井沢に着いたと日記に書いています。このような長時間に及ぶ移動中、医師でもあるランバスは痛みと戦っていたのです。時は流れ、軽井沢から新幹線に乗った私は、わずか 1 時間で東京駅に着いてしまいました。

その日の内に横浜総合病院に入院したランバスは、1 週間後、T. H. ヘーデン神学部長の見舞いを受けました。前年 7 月、アメリカに帰国していたヘーデンは、9 日朝、横浜に入港するなり、ランバスの入院を知らされ、あわてて駆けつけたのです。見舞いを済ませたヘーデンは、その日の列車で神戸に向かい、翌朝 9 時、関西学院に到着しました。このほかにも、東京からウェンライト夫人、神戸からニュートン、J. S. オックスフォード、吉岡美国が見舞いに訪れました。

手術 (ヘーデンによると、前立腺切除) は 12 日に行われました。執刀は、アメリカ海軍病院のスピア医師 (総合病院の石浦医師が補佐) でした。その後、順調に快復し、危機を脱したと思われたのですが、22 日に急変し、24 日には昏睡状態に陥りまし



「Reunion (再会) 2021」

この時、年次総会が開催された「軽井沢の講堂」は今も軽井沢の地にあるのでしょうか？ 昨年 10 月、私用に軽井沢を訪れた私は、「オーデトリウム通り」という名の道を歩いたことを思い出しました。その時入手した「旧軽井沢マップ」を開くと、この通りに面して「軽井沢ユニオン教会」がありました。「講堂」とは、この教会のことかもしれません。そう思って調べてみると、財団法人軽井沢避暑団発行の *Karuizawa Summer Residents' Association Handbook* に、その活動の一つとして、「軽井沢オーデトリウム (ユニオンチャーチ) の運営・礼拝」が挙げられていることを紹介する論文が見つかりました。

8 月 30 日から始まった総会の最初の 3 日間、ランバスが耐えていたであろう肉体的苦痛に気付いた参加者は一人もいなかったそうです。2021 年 7 月、軽井沢ユニオン・チャーチを訪れた私は、100 年前に議長としてランバスが立ったと思われる講壇に上がり、礼拝堂全体を見渡しました。そして、「辛かったです。大変だったね」と心の中のランバスに語りかけました。



ブラフ・クリニック  
(横浜市中区山手町 82 番)

た。そして、26日午前5時30分(35分とする資料もある)タウソンに見守られて亡くなりました。最後の言葉は「私は常に見守っています」(“I shall be constantly watching.”)だったと伝えられています。しかし、タウソン自身が前述の年次報告に書いているのは、意識が薄れゆくランバスに、「デージー(ランバスの妻)に何か言い残すことはありますか?」と問いかけた時、「いつも見守っていると伝えてくれ」(“Tell her, I am watching all the time.”)という言葉が返ってきたということです。

終焉の地となった横浜総合病院は、何度か名称変更し、1982年まで存在していたことがわかっています。JR桜木町駅前からバスに乗って病院の跡地を訪ねると、その一角に今はブラフ・クリニックがありました。

The Public Hospital (横浜公立病院)	1863~1866
The Bluff (Dutch) Hospital (横浜山手オランダ病院)	1866~1867
The Yokohama General Hospital (横浜総合病院)	1867~1950
The Bluff Hospital (横浜山手病院)	1950~1982

訃報を受けたヘーデンは、直ちに横浜に向かいました。29日夕方、横浜ユニオン・チャーチで追悼礼拝が行われた後、遺骨となったランバスは小さな箱に納められ、関西学院に運ばれました。当時の関西学院は、原田の森と呼ばれる場所にありました。現在の神戸市灘区で、学校の跡地は神戸市立王子動物園になっています。遺骨が到着したのは10月1日でした。「正門より神学館に至る道の両側には中学部、高等商業学部〔、〕文学部、及〔び〕神学部の職員及び学生一同整列をもて遺骨を迎へ」、神学館に安置されました。告別式は、3日午後2時半からチャペルで行われました。このチャペルだけは今も創立の地に残り、神戸文学館として使われています。

その後、遺骨は上海に運ばれ、11日には上海でも葬儀が営まれました。上海は、宣教師の両親のもと、ランバスが生まれ育った故郷で、愛する母の眠る地でした。ランバスと共に上海に渡ったのは、吉岡のほか、ニュートンとタウソンでした。神戸港から乗船する前、小野浜墓地に眠る父に別れを



神戸文学館(ブランチ・メモリアル・チャペル)  
撮影:高木久留美さん

告げています。この墓地は、六甲山再度公園内の神戸市立外国人墓地に移設されるまで、旧生田川(現在のフラワーロード)の河口左岸にありました。

上海での葬儀の日、原田の森の関西学院では中央講堂の定礎式が行われました。その際、ランバスの遺髪が礎石に納められたと記録に残っています。しかし、1929年に関西学院は上ヶ原に移転し、中央講堂ももうありません。遺髪は、今も創立の地に眠っているのでしょうか。



横浜ユニオン・チャーチの礼拝堂は、1910年、山手49番(現在のフェリス女学院中学校・高校の敷地内)に建てられた。1923年の関東大震災で倒壊後、再建されたが、横浜大空襲により焼失。現在の礼拝堂は66番にある。



T. H. ヘーデンに抱かれ、神学館からチャペルに向かうランバス(1921年10月3日)。アルバムの手紙には“*Ashes of Late Bishop Lambuth Sept. 1921*”と記されている。



上海に向かう前、吉岡美国に抱かれ、神戸の小野浜墓地に眠る父に別れを告げるランバス(1921年10月7日)。

右端:J. C. C. ニュートン 右から4人目:W. E. タウソン  
墓石の左:T. H. ヘーデン 左から3人目:C. J. L. ベーツ